

---

# 勇者ヤマダ【見習い編】

高瀬 悠

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

勇者ヤマダ【見習い編】

### 【著者】

Z32790

### 【作者名】

高瀬 悠

### 【あらすじ】

勇者を目指す真面目な山田が、勇者になろうと奮闘する物語。  
「てめえら、マジで真面目にやがんとやれ！」

気まぐれ不定期更新。

## 勇者見習いやマタ

「お前に俺が越えられるか?」

伝説の勇者アドバルトはこう言った。  
幾多の困難を、世界を、そして仲間たちを救つてきたその手で。  
幼い僕の頭をくしゃりと撫でて挑発的に微笑した。

「越えてみる。お前が本当に、勇者になりたいと願つならな

僕は忘れない。

この誓いを。

彼の偉大なるその背を越え、いつか……

いつか必ず、最高の仲間たちとともに最強の勇者になつてみせる  
と。

それから数年後。

冒険家育成学校 初等部勇者科に入学して一ヶ月。  
やつと、僕は勇者見習いとしての第一歩を踏み出すことになりま  
した。

これから学校長が半ば強制で勝手に編成して作ってくれたチームとともに、チーム適性試験に挑まなければなりません。

冒険でのチームワークはとても重要です。

チーム一丸となって、学校長の出す全ての試験をクリアすることができるば、僕は晴れて勇者になることができ、その時のチームメンバーが一緒に冒険する大切な仲間になります。

僕は学校長が編成してくれたこのチームを……いえ、たぶん仲間と言っちゃつていいのかどうかも疑わしい仲間たちとともに、これから第一試験に挑むことになりました。

まずはレベルの低い魔物退治が第一試験です。

水色スライムを三十四、頑張って討伐してきたいと思います。

## 一、どんなだけヤル気ねえんだよ（前書き）

お気に入り登録してくださった方、ありがとうございます。  
心からお礼申し上げます。

「、どんだけヤル気ねえんだよ

【第一試験】 水色スライム三十四、討伐。

実習先であるサラク平原へ馬鹿真面目に集合したのは、なぜか僕だけだつた。

担任の男性教師 カルロウ氏は驚かなかつた。平然とした顔で、持つていたバインダーに目を落とし、スラスラと何かを書いていく。

「山田洋一。第一チェック合格だな」

「あの、先生。僕の仲間が誰も来てくれません」

「そりや そうだろう。お前は勇者志願者だからな」

「先生、言つている意味がよくわかりません」

「何を言つている。勇者が旅立つ時は必ず一人だ。見習いの剣は持つたか？ 旅立ちの服は忘れずに装着したか？」

何かを誤魔化された気がした。

「あの……先生。すでに敵が僕の目の前にいるんですけど……」

「攻撃をしない限り、奴らも襲つてこないから安心しろ」

「安心している場合じやないと思ひます。僕一人で三十四なんて体力が持ちません」

「ほお」

カルロウ氏が感嘆の声を漏らす。

「つまり仲間が必要だと言つんだな？」

「当然です」

いつたい何の為にチーム編成なんかしたんだろう、と思いたくな  
る。

カルロウ氏は再びサラサラとメモし始めた。

「山田洋一、第一「チェック合格だな」

「どんだけ回りくどいんですか？」の試験

「チェック項目は以上だ。さて、次は仲間を冒険に誘つて、『よい  
よ魔物退治だ』

「先生。昨日僕が仲間に渡した連絡プリントに、何か意味はあつた  
んでしょうか？」

「ない。元々あいつ等がプリント一枚で集まるとは到底思えなかつ  
たしな」

「彼らにやる『氣』はあるのでしょうか？」

僕がそう問うと、カルロウ氏はこいつと笑った。

「それをやる『氣』にさせるのが勇者見習い。山田洋一。君の役目だ」

「先生。それって単なる個々のモラルの問題だと思います」

## 一、冒険だらうしてんだねー（前書き）

「評価くだせつありがとひりやれこもした。  
深くお礼申し上げます。

## 一、冒険だつつてんだろー

僕の仲間だろつと思われる五人を紹介します。

まずは彼、初等部剣士科に所属しています一年生で同じ年の幼馴染み グランツェです。

剣の腕はとても優秀です。

連絡プリントを渡していたにも関わらず、彼は普通に教室にいました。

「お？ ヨーハチ。どうしたんや、その格好」

「連絡プリント見ててくれた？」

「あー、あれか。見た見た。何するんや？」

「僕のこの格好見て、わからないかな？」

仲間を一人、確保しました。

次に彼、初等部魔法科に所属しています一年生で同じ年のクレイシスという人です。

彼は魔法の天才です。先生もびっくりするほどのすごい魔法を自然と使つたりします。なぜこの学校に入学してきたのか意味不明です。誰も理由を知りません。

連絡プリントを渡していたにも関わらず、彼も教室にいました。

「……何の用？」

「いや、あの。昨日渡した連絡プリント、見ててくれたのかなつて思つてさ」

補足として、無口で無愛想で怖い人です。そして極めつけはグランツェとともに仲が悪いです。

「よお、魔法使い。相変わらずムスッとした顔してんな」「ああ思い出した。あの時のイカレ剣士か。暇潰しに喧嘩でも売りに来たのか?」

「なんやと、てめえ。やる気か?」

「ちょっとストップ! 違うから。ほんとマジで、お願ひだから一人とも喧嘩しないで」

仲間をまた一人、確保しました。

次は彼女、初等部召喚科に所属しています一年生で同じ年のウララちゃんです。

召喚の腕はまだまだですが、学校のアイドルとして男子にとても人気のある、かわい娘ちゃんです。

髪はおさげで眼鏡もかけていて、性格も大人しく、大変なドジつ娘です。

まあ、だからじやないけど。連絡プリントを渡していくにも関わらず、彼女も教室にいました。

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい」

「い、いや、もういいよウララちゃん。僕もちゃんと迎えに行かなかつたのが悪いし」

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい」

「いや、だからもういいって。ウララちゃん」

彼女が謝る理由。それは極度の方向オンチ。どうやら冒険には送迎バスが必要のようです。

三人目の仲間を確保しました。

次に彼女、初等部狙撃科に所属しています一年生で同じ年のリク

さんです。

狙撃の腕は名人並です。

髪はショート・カットで、性格は大変サバサバでツンケンとしています。

連絡プリントを渡したにも関わらず、彼女はなぜか屋上で魔弾銃を構え、数十キロ先の魔物を捕捉中でした。

「連絡プリント？」

「う、うん。見ててくれたかなと思つて」

「知らない」

「そ、そうですか……」

対応に困っていた僕との仲介に出て来てくれたのはクレイシスさんでした。

ちなみに、この二人は兄妹です。

「リク」

「何？ 兄さん」

「学校長との約束だつただろう？ 山田洋一 という人物を一人前の勇者にしろ、と」

「兄さんはどうするつもり？」

「オレは従う」

「じゃあ私も従う」

「はい。四人目確保しましたー。」

最後に……えーっと。彼、でいいのかな？

初等部格闘科に所属しています一年生で同じ年のラウル君です。

彼はなぜか音楽室でリコーダーを吹いていました。

ただ今絶賛女装中です。これも敵をあざむくための演技なんだそ

うなんんですけど……

「あの……すゞくしつくり似合つてますね。普通に女子生徒に見え

るんですけど」

「ありがとうございます」

長いストレートの黒髪。声変わりしていない声音。まるでおどぎ話から出てきたお姫様みたいな、やんわりとした雰囲気の彼だった。「えつと、連絡プリントの」と来たんだけど、昨日渡したやつ見てくれた?」

「ええ。世界チャンピオンを決める格闘大会に出場できる」とても嬉しく思います」

「違います。あの……魔物退治の意味、わかっています?」

「ですから、格闘試合のことでしょう?」

「僕のこの格好見て、わからないないかな?」

「あ、そういう意味だったの。気付かなくて」「めんなさい」

はい。これで全員確保できましたあー、先生。

「、手加減ぐりこじりよ、かくしよー！

はい、僕は今仲間を連れてサラク平原に来ております。  
サラク平原には水色スライムがうようよと生息しています。

「先生。仲間が全員そろいましたー」

「よくやつたな、山田。このメンツを全員そろえるとは、たすが勇者志願者だ」

「モラルの問題です。先生」

改めて【第一試験】 水色スライム三十匹、討伐。

「これから何するんや？ モーリチ」

「ここのいる水色スライムを三十匹討伐すればいいんだ。みんなで手伝ってくれないかな？」

僕は見習いの剣を構えて周囲を見回し、みんなに……みんなに  
つて、あれ？ いつの間にか三人減っている。

「なんや、そういうことやつたんか。はよ詣つてくれんとフライン  
グで変なモンを討伐したやないか」

グラントはスライムどころか隣平原に生息するレベル九のワ  
ルドウルフを討伐し、その毛皮を三十枚持っていました。

「…………」

「よし。水色スライム三十匹やな。楽勝」

「待つて。実力はもう充分わかったから本気で待つて。平等に分配しよう。僕のレベルが上がらなくなる」

「それもそやな。じゃあお前とウララで十匹。あとは俺がやる。どうや?」

「う、うん。それでいいよ」

「ウララは?」

「は、はい。大丈夫です」

「よし。じゃあやるか」

「待つて」

僕は待つたをかけた。

「他の人達が居ないんだけど……」

「ああ、アイツ等やつたら恐らく『試練の洞窟』ん中や」

あーそうですか。スライムは眼中にないですか。

僕は仲間の実力を改めて知ることができた。うん、これも立派な勇者の役目だ。

ほんと。何の為にこのチームが編成されたのか、本気でわからなくなる。

グラントヒュは先立つてがんがん水色スライムの討伐を始めました。僕に悩んでいる暇はありません。

「ウララちゃん」

「はい」

「僕達も頑張って水色スライムを討伐しよう」

「あの、ヤマダさん」

「ん?」

「召喚、初めてやるんですけど。いいで試してみてもいいですか?」

「いいよ」

僕は素直に了承した。

きつとウララちゃんのことだ。かわいい子犬とかドラゴンとか、そういうものを召喚するんじゃないかな？

ウララちゃんが真剣な表情で、手持ちの杖を使って地面に魔法陣を描いていきます。

僕はそれを微笑ましく見つめていました。  
かわいいな。一生懸命なその姿……ハツ。いかん。勇者としてあるまじき言葉を。

魔法陣が完成し、ウララちゃんは召喚を始めました。

「火をまといし精靈よ。出でよ、リトル・ドラゴン」  
うん。やつている姿がすごくかわいい。

が、すぐにウララちゃんは何かに気付いたようで。

「あ。線一本まちがえちゃいました」

召喚されたのはドラゴンとは全く違う、火をまとった大男でした。大男は口から巨大な火の玉を吐き出すと、スライム九匹を消し飛ばし、山をも消し飛ばしてしまいました。

僕はそれを見て呆然とするしかありませんでした。

残った討伐の数は一匹。

「ちくしょー！」

僕は泣きながら全力でその一匹に向かっていく。

が、水色スライムは意外に手ごわく、僕だけがひん死の状態とい

「結果に終わってしまった。

【第一試験】

合格。

## 一、代理は仲間に入りません。

第一試験に入る前に、まずは作戦会議です。四人は集合かけて集まってくれたのですが、どうしても一人来てくれません。僕の勇者としての力量が問題でしうか？それとも

「作戦会議？」  
「うん。みんな集まっているからリクさんも来てくれると助かるんだけど」

リクさんは相変わらず屋上で魔弾銃を構えていました。

僕は彼女の邪魔をしないように 以前、彼女の背後に近づいたら銃口を向けられたので リクさんからある程度距離を置いた背後からそっと声をかけてみました。

彼女の返事はいつも素っ気無い。

「行かない」  
「いや、えつと……」

僕は困りました。彼女のお兄さんであるクレイシスさんがこの場に居てくれたら助かるんですけど、僕は勇者志願者なのでいつまでも甘えるわけにはいきません。仲間をきちんと集めることも勇者の大事な仕事なのです。

「あの……リクさんが来てくれないのは、僕に勇者としての力量が足りないからですか？」

「それもある

「そこはオブリークトにお願いします。僕は背を向けてしみじみと泣いた。

「嫌いなの、私

「僕ですか？」

「群れて生活するのが嫌いなの。だから行かない」

「でも僕たちは仲間です。仲間なら作戦会議ぐらいは参加してください

さい」

「作戦は兄さんから聞くわ

「ダメです！」

「じゃあ私の代理を行かせるから。今回はそれでいいよね？」

「……」

「あたしかに。行きたくないという女の子を無理やり連れていいくのは、かわいそうな気がしてきました。

「わかりました。じゃ今回だけ特別ですからね」

「そう言つて引き下がる僕は、勇者失格なのでしょうか？」

## 一、「バナナはおやつに入りません。

はい。僕は今仲間とともに、学校の相談室を貸しきつて作戦会議を開いております。

議題はもちろん

「バナナ……？」

ではありません。

どうすればキング・オオイノシシをおびき寄せられるかの話し合いでです。

それなのに、リクさんの代理である彼女 エメリシアさんが……

ああ、紹介が遅れました。リクさんの代理人が来てくださいました。

初等部武器・防具製造科に所属していますエメリシアさんです。朱髪をショートカットにし、活発で男まさりな方です。

製造の腕はよく知りません。

ですが、すごく面倒見が良くて、男女ともにとても人気のある方だというのは知っています。

そんな彼女が、突然こんなことを発言してきましたね。

「バナナはすぐ栄養価の高い食べ物だと思っている

「バナナはデザートだ」

と、クレイシスさんがなぜか真剣にそう反論しました。

クレイシスさんが話に乗ったことで、今度はグランシエまで話につられていきます。

「おい、魔法使い。お前何言つてるんや？ バナナは『飯や』

それになぜかウララちゃんまで真剣に、

「そうですね。南国の方々はバナナを主食にすると聞きますし」

ラウル君まで、

「それじゃバナナはおやつ？ それとも『ご飯』？」

僕はバンバンと黒板を叩いて話を戻すようみんなに言いました。

「今バナナ関係ないよね？ この話し合いでバナナはすぐ関係ないよね？」

「じゃ、お前はどう思つんだ？」 山田洋一

「え？」

クレイシスさんがバナナ話を振つてきました。

「ヨーハチもバナナは『ご飯』だと思つよな？」

グランツヒも振つてきます。

そしてなぜかウラリちゃんが手を組んで、挙むように訴えてきます。

「勇者志願のヤマダさんが『デザート』と申されるなら、わたしはそれに従います」

「え？ いや、何の話？」

キヨドる僕の田の前にエメリアさんが近づいてきて、胸倉を掴み、脅迫してきました。

「お前の一言でこのバナナの命運は決まる」

と、手持ちのバナナを僕の頬にぐりぐりと押し付けてきました。僕はバナナを指差して言いました。

「バナナだよね？ これ、ただのバナナだよね？ 関係ないよね？」

第二試験にすごく関係ないよね？」

「ヨーハチ！ バナナは『ご飯』や！」

グラントヒの言葉に、クレイシスさんが鼻で笑つてツツツミます。

「バナナは『デザート』だ」

「何やと、魔法使い！」

「もう一度言つ。バナナは『デザート』だ」

「上等だ、てめえ。外出ろや！」

「望むところだ」

大変です。クレイシスさんとグラントヒの間でバナナ戦争が始ま

つてしましました。

僕はすぐに二人の間を割つて、喧嘩を止めます。

「これってすごくどうでもいい喧嘩だよね？ ただのバナナだよね？ 第一試験に関係ないよね？ なんでバナナの話だけでそんなに盛り上がるの！」

「ヤマダ」

ドスのきいた声でエメリシアさんが僕の肩を掴んできます。恐る恐る振り返れば、すぐく怖い形相でエメリシアさんが僕のことを見込んでいました。バナナを片手に掲げて、

「男ならハッキリ決める。だからお前はヘタレなのだ」

「もうやめてください！」

ウララちゃんが僕をかばつてエメリシアさんの前に割り込んできました。

「これ以上ヤマダさんを責めるのなら、わたしがお相手します！」

と、魔法の杖を構えました。

「ぐどーでもいいバナナの話だよね？」

僕はラウル君に助けを求めるようと手を向けました。

しかし、ラウル君はなぜか突然リコーダーを吹き始めました。

僕は苛立たしく頭を搔いて叫びました。

「もーいい！ わかったよ！ 僕が先生に訊いてくればいいんだろ！」

「！」

と、いうわけで。

「先生。バナナを食料として討伐必需品に認めてください」

「ダメだ」

「ですよね」

バナナがデザートだらうとご飯だらうと、討伐には一切関係ない  
ようです。

1、「野生の動物にHサを与えなごやへだせ」。（前書き）

お気に入り登録してくださった方、ありがとうございます。  
心からお礼申し上げます。

「一、野生の動物にヒサを与えないでください。」

【第一試験】 キング・オオイノシシ、討伐。

はい。僕は今、五人の仲間とタカタカ森に来ています。森の中はイノシシだらけでした。

キング・オオイノシシはどうしているのでしょうか？

あ、そうだ。ちなみに代理人は討伐の仲間として認められないので、ヒメリアさんはここに居ません。

そういうことで、リクさんはちゃんとチームの一員として参加してくれました。

ありがとうございます。

僕が礼を言つと、リクさんは素つ氣無くこう言いました。

「貸し、一つだから」

酷すぎます、リクさん。

「で、どーするんや？ モーイチ。片つ端から退治していくか？」

グラントンが攻撃態勢に入ります。

「待つて。効率良くやつていこう」

僕は仲間に待つたをかけました。

今回みんなバラバラではなく、ちゃんと僕の指示を待つてくれています。

僕は緊張に胸を高ぶらせながら、作戦を言いました。

「みんなの力は確かに強い。でもいくら強くたつて体力に限界がある。山岳イノシシや暴れイノシシを片つ端から相手にしていたら、

いざキング・オオイノシシが出てきた時にチーム一丸となつての攻撃が難しくなる。だから、温存しながら効率良く戦おう「なんか僕、今スゲーかつこいいことを言つたと思う。なぜならみんな、僕よりすごく強い人達だからだ。その人達が僕の作戦を素直に聞き入れてくれている。僕つてまるで勇者みたいだ。

「なるほどな」

クレイシスさんが感心してくれました。

「さすが勇者志願者やな、ヨーヨーチ」

グラントエまで。

リクさんが魔弾銃を手に行動を開始します。

「じゃあ私はあの小高い山から援護する」

ラウル君が指の関節をパキパキ鳴らしながら先頭に進み出ます。

「じゃあボクが右をやるね

え?

「じゃ俺は左な」

あ、あれ? ちょっと待つて。

「左はオレだ、イカレ剣士。お前は右斜めを行け

「右斜めつてどこや! 左は譲らん! てめえが右斜めに行けや!..」

「早い者勝ちだ

「なんやと!」

「ちょっと待つて!」

僕はみんなを止めましたが、誰も聞いてくれません。

唯一残つたのはウララちゃんだけでした。それ以外は全員、敵に

攻撃を始めています。

ウララちゃんが僕の手を握り締めて言いました。

「さあ、行つてくださいヤマダさん

「は?」

「雑魚はこちうらで引き受けます。ヤマダさんは早く手持ちの誘い工

サでキング・オオイノシシを見つけてください」

「ちょっと待つて」

「あなたの勇気に感動しました。わたし達はあなたを援護します。だからヤマダさんは何も気にせず、キング・オオイノシシをここまで誘い出してください」

その言葉を残し、ウララちゃんも戦いを始めてしました。

勇者。それは勇気ある者。

僕はアイテム袋の中に入っていたキング・オオイノシシの誘い工  
サを取り出しました。

これから一人でキング・オオイノシシをここまで誘い出して来な  
ければなりません。

でもこれって、絶対みんなやりたくなかったやつだよね?  
これの係りになる人はジャンケンで平等に決めようつって、そう決  
めていたはずだよね……?

上手い具合に押し付けられた気がする。

僕は泣きながら森の中を走った。  
血ら工サとなつて。

## 一、僕たヒーローは似合いません。

物語といえば大抵、かつていいヒーローとかわいいヒロインが華麗に敵を倒して活躍するものです。

ええ。たしかに僕も、小さい頃はそういうものに憧れていきました。勇者を目指したのもそれが理由です。

重装備を身にまとつて、赤いマントをなびかせ、魔王を相手に大剣を構えて「さあ行くぜ!」なんて仲間を統率して敵陣に突っ込んでいく。

それが僕の夢であり、憧れでした。

「ぎゃあああああつ!」

それなのに僕は今、キング・オオイノシシ相手に逃げ回っています。

キング・オオイノシシを誘い出すこと。これが僕の役目です。走る先に、ようやく仲間たちの姿が見えてきました。助かつたあー!

「みんなー! キング・オオイノシシを連れてきたからー!」

僕は大声で叫びながらみんなに知らせました。  
みんながこっちに注目します。

「よくやつた、ヨーヨー! ササガヤ!」

グラントンが嬉しそうに僕に向かつて駆け寄り、そして大剣を構えなおしてカツコよく僕の横を交錯していきます。

「あとは任せや、ヨーヨー!」

「「めん、よろしく」

非力な僕を許してください。

そしてまた僕の横を誰かが交錯していき　え？

誰かではありませんでした。僕の横を交錯していったのは攻撃魔法です。

後ろでグラントヒュが悲鳴を上げます。

「だあ！　あつぶねえだろ、ボケ魔法使い！　俺らを殺す氣か！」

僕の走る前方にはクレイシスさんが右手を突き出して構えていました。

クレイシスさんがぼそりと何かを言っています。

「オレは退かない。てめえらが退け！」

「はい、ごめんなさいです」

僕は素直に道を開けるようにして逃げました。また攻撃魔法が僕の横を通り過ぎていきます。

「ええかげんにせえや！　このボケ魔法使い！」

グラントヒュがキング・オオイノシシと戦いながら叫んでいます。しかしクレイシスさんは聞く耳持たない様子で、また魔法を放つてきました。

僕は息を切らしながらようやくみんなと合流します。

「みんな揃つてる？」

ラウル君が向かってきた山岳イノシシもを蹴つたり投げ飛ばしながら、

「雑魚はだいぶ片付いてきたね。あとは僕一人で何とかなるから任せよ」

クレイシスさんが僕に言います。

「山田、お前はラウルと一緒にイノシシもを片付けろ。オレはリクとイカレ剣士とともにキング・オオイノシシをやる」

僕はそれに同意しました。

「わかった。 ん？ あれ？ ちょっと待つて」

気付いて僕は、慌ててクレイシスさんを引き止める。

「何か不満か？」

「そうじゃなくて、ウララちゃんは？」

「え？」

言われてそういえばと、クレイシスさんが辺りを見回す。

「あれ？ どこかそこら辺にいると思っていたんだが……」

「クレイシスさん、あとお願ひします。僕ちょっとウララちゃんを探してきます」

僕はすぐにその場を駆け出した。

「あ、ちょっと待て山田！」

クレイシスさんに呼び止められるも、僕は無視して走った。

クレイシスは焦るようにラウルへ声をかけた。

「ラウル、悪いがここはお前一人で片付けてくれ」

「うん、このくらいの量ならいいよ。ヤマダ君は？」

「答えてくる暇はない。とにかく頼んだぞ」

「おつかー」

持ち場を任せ、クレイシスはキング・オオイノシシのところにいるグラントの元へと走った。

駆け寄るクレイシスにグラントは不機嫌な顔で、

「なんや、お前今頃になつて。これは俺の獲物や」

「イカレ剣士。お前はすぐに山田のあとを追え

「なんでお前の指示に従わな」

「山田が誘き工サを持ったままウララを探しに行つた。キング・オオイノシシの存在は一頭だけとは限らない。お前はすぐに山田のあとを追え。こいつはオレとリクで引き受けける」

「……わかつた」

グランツェは大剣を鞘に収めた。念を押すように尋ねる。

「キング・オオイノシシ相手に戦力一人で本当に大丈夫なんやな？」

「くどい。早く行け」

グランツェは舌打ちして踵を返すと、山田のあとを追いかけた。

「「、それでも僕は勇者ですか」」（前書き）

お気に入り登録をしてくれた三名の方、ありがとうございます。

心よりお礼申し上げます。

「一、それでも僕は勇者です！」

「ウララちゃん！」

僕は居なくなつたウララちゃんを探して森の中を走り回りました。もちろん森の中はイノシシだらけで、何頭ものイノシシが僕に向かつて襲い掛かってきます。

「このッ！」

僕は見習いの剣を構えてイノシシに突撃しました。敵うはずがないんです。

だつて僕はスライムごときで苦戦するくらいの力でしかないんだから。

イノシシに体当たりされ、僕は大きく吹っ飛びました。樹にぶつかり、地面に倒れても。

僕は立ち上がり見習いの剣を構えます。

「邪魔するな！ 僕はウララちゃんを探しているんだ！」

きつと彼女のことだ。道に迷つてどこかで泣いているに違いない。イノシシは前足で地面を搔いていました。また体当たりしてくるつもりです。

「退けよ！ あっちに行け！」

脅しの効果はきいていません。

イノシシが突進してきました。

僕は雄たけびをあげながら剣を振りかぶつて突撃しました。

剣は弾かれ、僕はまた吹つ飛びました。

そんな時です。

「ヨーヨーチ、剣つてのはこう扱うんや」

グラントンが僕に入れ替わるよつとしてイノシシに攻撃しました。

一撃必殺。

大剣を一振りで、グラントンはイノシシを倒しました。

「グラントン！」

僕は驚きと嬉しさに地面から飛び起きました。

グラントンは見る間にイノシシを一掃していきます。

「ええか、ヨーヨーチ。剣はチャンバラやない。技や

「ぎ？」

「木の棒みたくポカスカと叩き合ひやなく、俺みたいに技でキメるんや！」

言葉と同時にグラントンはまた一振りしてイノシシを倒しました。僕は自分の持つ見習いの剣を見つめました。

するとビームから女の子の悲鳴が聞こえています。

僕はハツとして叫びました。

「ウララちゃん！」

「行けや、ヨーヨーチ。援護はしてやるから周囲なんて気にせず走れ」

僕は見習いの剣を握り締めました。

「わかった」

グラントンの言つ通りに、周囲なんて気にせず走りました。

そしてその先に、ウララちゃんを見つけました。

彼女がイノシシの攻撃を受けています。

僕は見習いの剣を構えて雄たけびをあげながら、そのイノシシに

突撃しました。

見よう見まねで一振りします。

倒すことはできなかつたけど、何とかダメージを『与える』ことができました。

僕はウララちゃんを守るよつとして背にかばいます。

「大丈夫？ ウララちゃん」

「ヤマダさん！」

後ろからウラカラちゃんが抱きついてきました。

相当怖かったのでしょうか。彼女は震えています。

グラニッシュがイノシシを一頭倒して叫んできます。

「ヨーヨーチ！ すぐに持つている誘きHサを捨てるんやー！」

森にただならぬ気配を感じました。

「キング・オオイノシシやー！」

グラニッシュの言葉とともにキング・オオイノシシが姿を現しました。

Hサは急いで持っていた誘きHサを遠くに投げました。

そして、

「行こう、ウラカラちゃん」

「はー」

僕はウラカラちゃんの手を取り、グラニッシュとともにその場から逃げました。

Hサは捨ててしまつたので、キング・オオイノシシが僕らを追いかけてくることはありませんでした。

その後、クレイシスさん達とも合流することができ、キング・オオイノシシを一頭倒したことを聞きました。

第一試験は何とか合格のようですが。

「僕だけ追試？」

学校に戻った僕は、カルロウ教師に第一試験の結果を報告しました。が、

「なぜ僕だけ追試なんですか？」

「山田。お前は何頭イノシシを倒すことができた?」

「.....」

「そういえば、僕は一頭も倒していません。」

「ウララでさえ一頭は倒しているんだぞ?」

「あー、そうだったんですね。」

「追試として【水色スライム十匹討伐】を、お前一人でやって来い」

その日の放課後。

僕は泣きながら一人で、スライム十匹を討伐しました。

まへもつまへ ほんじうだむここや。 (前書き)

お氣に入り登録してくださった方、ありがとうございます。  
心よろめ礼申し上げます。

はつめつとひじりでもいいです。

第一試験に無事合格した僕たちはいよいよ第三試験に挑むことになりました。

ここまでとても順調なチームワークです。

なかなか良い感じの仲間なので、僕は正直ホッとしています。

ですが、勝負はここからです。

第二試験はレベルが一気に高くなります。

見習い勇者の大半が挫折すると言われている第三試験。

荒地に住むゴブリンから、盗まれた秘宝『スーザの宝石』を奪還すること。

彼らは小人サイズながらも集団で襲ってくる強敵です。

気性が荒く残虐な生き物なので、命を落とす危険もあります。

この試験で重要視されるのはチームワークです。

生きるか死ぬかはチーム内の助け合いにかかりています。

僕たちのチームはたしかにまとまりが無いかもしれません。

でもみんな、互いを気遣う良い人たちだからきっと大丈夫です。

僕はそう信じています。

### III、それついでにでもよくな?

第三試験の前にお決まりの作戦会議です。

「つて、あの……エメリアさん?」

「なんだ? ヤマダ」

「どうして僕が席に着かなければならんでしょう?」

「試験で大事なのはチームワーク。チームは揃つてなんぼのもの。席が後ろになつたからと言って文句言わない」

「席が後ろはどうでもいい。」

「あの、僕は勇者なんですけど。勇者はチームのリーダーであつて、そのリーダーが司会進行を」

「ふーぴー。」

僕の隣でリーダーの音が聞こえています。

目を向ければ、いつの間にかラウル君が隣の席に座つていました。ふーぴー。

しかも音程が微妙に変です。

「そんなことよりヨーイチ。オセロや、オセロ。オセロしようや」

僕の前の席に座つていたグラントシエが突然満面の笑みで振り返ります。

僕は戸惑いました。

「そんなことつて……。今ゲームやつている場合じゃないよね?」

「ヨーイチ、お前。そんなこと言つて、このまま勝ち逃げする気やな?」

「あー。まだ気にしてたんだ、のこと。」

「そういえば昨夜、グラントシエが僕の部屋に押し入つてきて『暇やからゲームしよや。やる言つまで帰らんからな』と駄々こねてきたので相手をしてあげたことを思い出しました。結果は何度やっても僕の圧勝。」

「わ、わかったよ。でも今は作戦会議中だし……とつあえずゲームは学校が終わってからにしよう」

「嫌や」

笑顔で全力拒否されてしまいました。

そういえばグラントンは昔からとても負けず嫌いな性格だったことを思い出しました。

「で、でもさグラントン。よく考えて」「うりんよ。げ、ゲームしようにもマス田も何もないじゃん」

すると遠く離れた席に座っていたウララちゃんが急に立ち上がりて、とてとてと僕の側に駆け寄ってきました。

「ヤマダさん。私、ヤマダさんの為なら舞台を作ることだつていいといません」

「ちょっと待つて。舞台つて何のこと?」

「私がこの世界にマス田の舞台を召喚します」

「いや、本気で待つて。急にスケールでかくなつたよね? 世界規模でゲームやつちやうと、ある意味勇者じやなくて魔王つて呼ばれるようになるから、僕」

離れた席でクレイシスさんが鼻で笑います。

「オセロで世界征服も悪くない」

却下します。

僕はバンバンと机を叩いて話を戻しました。

「オセロとか世界征服とか作戦会議に関係ないよね? 今重要なのはゴブリンをみんなで倒す方法だよね?」

「お前が仕切るな、ヤマダ」

ぱーーん、と。黒板消しが僕の顔にクリーンヒットしました。

投げたのはもちろんエメリシアさんです。

こほんと咳払いして、エメリシアさんは議題を進めました。「今重要なのはゴブリン退治ではなく、どうすれば憧れの人にチョコを渡すことができるかだ。

バレンタインデーとは女子が男子に想いを届ける大切な日だ。

それなのに学校はチョコの持ち込みを禁止としている。

そこで女子を代表して訴ね。

チョコはおやつか何か？

チョコがおやつだの？ いわゆるおやつの中には、非モテの僕にサバ一  
でもいいのですけどねー。

### III、旅立つ前の説明書（前書き）

お気に入り登録してくださった二名の方、ありがとうございます。  
す。

心からお礼申し上げます。

### 三、旅立ち前の説明書

冒険に旅立つ時、今どきの勇者御一行はバスや汽車を使って現場に行きます。

なぜならその方が安全だし、なにより現場に到着するのが早いからです。

駅のホームで一人静かに汽車を待つ僕に、カルロウ教師はこう言いました。

「またお前一人か、山田洋一」

僕はビシツと手を挙げて発言します。

「はい、先生」

「どうした？ 山田」

「公共機関を使って冒険するって、何か間違つてないですか？」

「良い質問だ、山田。世の中にはな、モンスター・ペアレンツという脅威の魔物が存在する。学校の先生たちでも倒せない危険な魔物だ。

より安全で安心な冒険をさせないとモン・ペアが学校を襲撃に来るんだよ」

「それ聞いて、なんだかゴブリンを一人で倒せそうな気がしてきました」

「ははは。何を言つている山田。安心していいのは道中だけだ。そこから先は自己責任だから気をつけろ」

「先生こそ、モン・ペアの災害に気をつけてくださいね」

「面白いこと言つじやないか、山田。だからお前はいつまで経つても勇者志願者なんだ。たまには一人でカツカツ良く逝つてこい」

「先生。言葉の中に誤変換があります」

「気にするな」

そう言つて、カルロウ教師は右手首に視線を落とすと腕時計を確

認しました。

「ところで山田。 それなり本気で仲間を集めに行かないと汽車が出るぞ」

「僕は拳を固め、怒りを押し殺しつつ答えます。

「わかつています」

「まあ、仲間を集めるのは勇者の旅立ちの基本だからな

「モラルの問題です。先生」

### III、旅立ちだつて書つてんだりー（前書き）

お気に入り登録してくださった方々、ありがとうございます。  
心からお礼申し上げます。

### 三、旅立ちだつて言ひへんだらー

とりあえず。

まずは捜しやすそうな仲間を順番に確保していくます。

そんな時です。

駅内に案内を知らせる音色が流れました。

『迷子のお知らせをいたします』

はい。さつそく一人確保しました。

「『』めんなさい、ヤマダさん」

「いいよ。気にしなくて。それよりみんながどこにいるか知らないかな?」

尋ねると、ウララちゃんは元気なく俯いて首を横に振りました。僕はハハと笑つて謝る。

「そうだよね。ごめん。じゃあ一人で一緒に探そう」

そう言つて、僕は『』へ自然な仕草でウララちゃんの手を取つた。その時、

「ひやあつー！」

「え？」

急にウララちゃんが悲鳴を上げて僕の手を激しく手を振り解きました。

そんなに僕と手を握るのが嫌だつたのだろうか。

僕は内心ものす『』へショックを受けながらも平常心を装い、また

謝る。

「『』……『』めん」

「……」

ウララちゃんは僕に触られた手を胸に抱き、真っ赤な顔で黙つて俯いていく。

え？ これつてもしかして、恋

「セクハラね」

僕の背後から冷めた口調でリクさんが言つてきました。

「つて、うおつ！」

僕は遅らせながら驚きの反応を返した。

「いつから居たんですか？ リクさん」

「ずっとよ。あなたに気配を悟られるようじや狙撃者としての自信をなくすわ」

それって新手のストーカーですか？

はい。二人目確保しましたー。

僕とリクさんとウララちゃんは次なる仲間を捜して、駅内の売店をウロウロしていました。

すると、

「あー ヤマダ君だ。それにリクたんもウララちゃんも一緒だー」  
売店から大量の駅弁を買い込んだラウル君が嬉しそうに手を振ります。

いやいや何事ですか、ラウル君。

「ら、ラウル君。そ、その弁当……」

恐る恐る僕が大量の弁当を指差すと、ラウル君はかわいく「きやは」と笑つて、

「買い占めちやつた。全部」

「か、かい……買い占め」

「そ。お店の弁当全部買い占めちゃった。一応五十四人分あるみた  
いだから、みんなの分もあると思う」  
充分だと思います。

ふと、ラウル君の後ろの売店からクレイシスさんも出てきました。  
何やらラッピングされた箱を大事そうに持っています。  
僕は恐る恐る声を掛けてしまいました。

「あ、あの、クレイシスさん？」  
「なんだ？」  
「それ、なんですか？」

「これか？ オセロゲームとやらが売られていたから思わず買つて  
みた」  
いやいや何事ですか、クレイシスさんまで。

「あ、あの……クレイシスさん。僕達これからゴブリン退治に行く  
んですよ？ わ、わかつていますよね？」

「オセロで世界征服も悪くない」

「…………」

真顔でそう返されてしましました。

はい。二人まとめて確保です。

最後はグランツェです。

さて彼はいつたいどこへ行つたのでしょうか？

「ヨーリチ！」

改札口からグランツェが手を振つて「ひりに走つてきます。  
しかもすごく爽やかな笑顔です。

グランツェはされました。

「さっきそこでトランプ売つてたから買つたんやー！ 次はトラン  
プで勝負やー！」



三、ライバルなんぢゆつでもここんです。（前書き）

お気に入り登録していくださつた方へ。  
「登録くださりありがと」いります。心からお礼申し上げま  
す。

### 三、ライバルなんてどうでもいいんです。

勇者にライバルはつきものです。

僕の場合、そのライバルが魔王だつたなら物語に面白みがあるのですが、はつきり言って僕はそこまで強くありません。

僕とVSDできるのはせいぜい水色スライムくらいです。

一体いつになつたら勇者らしく天空の鎧に赤いマント、背中に大剣を携えて、魔王城が見える断崖に佇み、背後にいる仲間に向けて『ここまで来たんだ。もう後には引けないぜ』などといつ台詞を力ツコ良く言えるのでしょうか。

先が遠すぎて見えません。

そんなことはさておき。

僕達は一つ遅れの汽車でようやく出発することができました。ひとまず安心です。

これから血もなく汗もなく涙もなく、快適な道のりを行くゴブリン退治の冒険が始まるわけですが……。

なんだか自分で言つていて、すこく虚しいです。

ふと、車窓から外へと視線を移すと、広い草原で巨大な亀の魔物が暴れています。

中規模パーティが十チームほど、協力し合いながらその亀と戦っています。

僕は窓辺に軽く頬杖をつき、その光景を見ながら「ふう」とため息を落として呟きました。

「そもそも仲間を増やしていった方がいいのかなあ……」

僕の二つ隣 三人腰掛け椅子の端 通路側に座っていたラウ

ル君が、弁当をはむはむと食べながら他人事のようにじつにます。

「増やしてもいいけど、弁当はもうないよ？」

弁当なんてどうでもいいんです。

僕としては買いました弁当を短時間で全部食べてしまったラウル君の買袋が気になりますけど、今はどうでもいいんです。

ただ肝心なのは

「どうすればロイヤルストレートフラッシュが出来るか、だ」

僕の向かいの窓際席に座っていたクレイシスさんが、トランプを片手に真顔でそう言つてきました。

僕は「はあ」と重いため息をこぼします。

トランプなんてどうでもいいんです。

ただ肝心なのは

「なんや、魔法使い。負けそつやからつてヨーヨーチにアドバイスもからつもりか？」

クレイシスさんの隣で、グラランショがトランプを片手に勝気な笑みを浮かべていました。

癪にさわつたらしく、クレイシスさんが不機嫌な顔で手持ちのトランプの裏側をグラランショに突きつけ言い返します。

「だったら勝負してみるか？ イカレ剣士

「ええで」

「一人は同時に手持ちのトランプを公開しました。

「くらえ、クソ魔法使い！ 僕のは『ロイヤルフラッシュ・きゅー

てい萌え萌え魔法少女』や！」

「残念だつたな、イカレ剣士。しつこは『ワブリー・ていくるーヤ

ンにやんメイド娘』だ

「 つて何の勝負！？ それ！」

僕は突つ込まずにはいられませんでした。

どうやら駅の売店でパーティーの一人がゲットしたのは、謎のトランプアイテムだったようです。

アイテム収納袋がいっぱいになつたら真っ先に捨てようと思いま

す。

ふと、僕の隣 ラウル君と僕との間に座っていたリクさんが、  
淡々とした口調で話を戻してきました。

「さつき仲間を増やすって呟いていたけど、あと何人の勇者を増やすつもり？」

ひどいです、リクさん。僕に不満があるのはすぐわかりました。  
ちょっと隅っこにうずくまって泣いてもいいですか？  
するトリクさんの言葉を受けて、僕の向かいの通路側に座っていたウララちゃんが、はっと顔を上げて驚きます。

「え！ ヤマダさんって増殖できるんですか？」

何の不思議ですか、それは。  
もしかしてウララちゃん…… 天然ですか？

そんな時でした。

「おやおや。間抜け勇者のパーティには、こんなにかわいい子猫ちゃんが三人もいるのかい？」

見知らぬ声の闖入(ちなんにゅり)に目を向ければ、見下すように僕らを観察する  
金持ちの坊ちゃん然とした男がいました。  
歳は僕達より少し上だと思われます。

白い上下のスーツに、胸ポケットには真っ赤なバラ。

そのバラを優雅な仕草で手に取り、男は軽くバラに口付けると微  
笑みながらこう言いました。

「このパーティから何人か引き抜いて、ボクちんのパーティに入れ  
ちゃおうかなあ」

「なんやと！」

グラントエが喧嘩になつて立ち上がります。

そんな時でした。

また別の方から声が掛かります。

「ルーキーのパーティ崩しは止めなよ、勇者」<sup>リーダー</sup>

また新たなキャラの出現です。

白い法衣をまとった強そうな魔法使いの男です。  
この人も、歳は僕達より少し上だと思われます。

魔法使いの男はすぐにクレイシスさんへと田を移しました。  
そのまま一人は無言で睨み合います。

知り合いなのでしょうか？

魔法使いの男は何を思ったのか、急に鼻で笑つて小馬鹿にするよう言葉を続けました。

「こんな奴がいるパーティなんだから崩しても意味がない。放つておいてもこのパーティは自滅する。  
そうだろ？ 元パーティ潰し・黒魔道師クレイシス」<sup>スレイヤー</sup>

### III、気に入りましたか？（記書き）

お気に入り登録してくださった方、ありがとうございます。  
心よりお礼申し上げます。

### 三、気付するといふ何事ですか？

人は誰でも、他人に言えない悩みや過去があるもののです。

「なんや、アイツ。急に態度悪くなつたな」

目的の駅に到着した僕たちは、駅のホームで一手に分かれることになりました。

無言でどこかへ去つていいくクレイシスさんとリクさんの背中を見つめ、グラント・エヴァンスがふてくされたようにそう呟きます。

僕は重いため息を吐きました。

何もこんなときにチームばらばらにならなくともいいじゃないか。「パーティ・スレイヤー言つたら魔王を支持する闇組織やろ。普通やつたら国際指名手配されているもんやないんか？」

「わかんないよ、そんなこと。学校長もそういう事情とか何も話してくれなかつたから……」

ラウル君が心配そうに僕の顔を覗き込みながら問いかけてます。

「彼等どこかに行つちやうよ？ 呼び止めないの？」

「……」

僕は悩みました。

ウララちゃんが僕の前に回りこんで、両拳をかわいぐギュッと握り締め、真剣な表情で僕に言います。

「二人は私たちの大変な仲間じゃないですか。呼び止めましょう、ヤマダさん」

「そうだね、ウララちゃん。」

僕は意を決し、二人を呼び止めることにしました。

勇者たる者、仲間の過去を気にしたらいけないんです。

僕は踏み出しました。

「 ちょい待てや、ヨーヨーチ

グラントシHが僕の肩を掴んで引き止めます。

僕は首を傾げてグラントシHへと顔を向けました。

「 アイツ等呼びに行くの、ちょい待てや……

複雑そうな表情をこじませて、グラントシHは氣まずくやつ言いませ

す。

僕は苛立つ心を抑えられませんでした。

「 なんだよ？ グランシH

「 ヨーヨーチ

「 何？ 」

「 お前、じつ思つ？ 」

「 仲間だよ。リクさんもクレイシスさんも これから先、誰にどんな過去があるのと僕たちは仲間だ

「 違う、やつこいつことやなこ

「 え？ 」

グラントシHはぽりぽりと頬を軽く搔きながら言つてくそつこ、  
「 僕ずっとアイツのこと見面いや思て『 魔法使い』 って格下で呼んでいたから、その……こきなり『 魔道師』 つて言い換えたら……嫌やないか思つて

気にするといひまそこですか？

僕たちはリクさんとクレイシスさんを追いかけました。

やつと二人の背を見つけ、僕は叫びます。

「 待つてよ、二人とも！ 」

するとクレイシスさんが足を止めてくれました。

リクさんも足を止めてクレイシスさんに尋ねます。

「 どうしたの？ 兄さん」

「 ……」

背を向けたままの一人に、僕は訴えました。

「第三試験はみんなでゴブリン退治に行くんだが、過去がなんだよ。チームワークがないと勝てない相手なんだから、今更こんなところでバラバラになることないだろ！」

僕の想いは届いたのでしょうか？

リクさんがクレイシスさんに尋ねます。

「だそうよ、兄さん。どうするの？」

クレイシスさんは静かに、持っていたオセロゲームに視線を落としました。

ぼそりと呟きます。

「リク」

「何？ 兄さん」

クレイシスさんは自嘲するように鼻で笑つて言葉を続けます。

「……今更だよな」

「そうかしら？」

「これを買った時にお釣りをもらい損ねたんだ」

「諦めて兄さん。今頃きっと募金箱の中よ。植樹に貢献したと思って前向きに考えるべきね」

「自分の金が植樹に使われたかと思つて、今度から山の中で気軽に攻撃魔法が放てなくなるな」

### 三、それは決してよくないのです。

町に到着した僕たちは、学校の指示通り、さっそく町長の家に依頼を受けに行きました。

町長の家に辿り着いた僕たちは、玄関先に立っていた町長らしき男性を見つけました。

きっとこの人が町長なのでしょう。たしかにそれらしい格好をしています。

彼の頭上には金色の吹き出しが付いていました。

その吹き出しにはケーキの絵が描かれてありました。

「…………」

僕は町長の吹き出しを見つめたまま真剣に、声を掛けようかどうか本気で悩みました。

「 って、何してんのやヨーヨーチ」

無言のまま町長と向かい合つ僕の背後から、グランシエが苛立たしく声を掛けけてきます。

僕はグランシエへと振り返り、吹き出し部分に指を向けました。

「え、だつて……」

なんでケーキの絵？

普通はクエスチョンマークとかお金袋の絵とか巻物の絵とか宝箱の絵とか

ウララちゃんが心配そうに尋ねてきます。

「話しかけないんですか？」

「この違和感は僕だけですか？」

するとクレイシスさんが真顔で会話に割り込んできました。

「いや、もしかしたら『イツ』は町長じゃないかも知れない」

「さすがクレイシスさん。僕も同感です。

「依頼人の吹き出しはドクロマークが普通だ」

「話しかけたくないです。

ラウル君も会話に割り込んできます。

「じゃあ苺の絵なら無難そうじゃない?」

「苺の意味がわかりません。

「ぐづつ!」

不意打ちで背後から、リクさんが僕を蹴り退けてきました。  
そのままリクさんは町長らしき男性に声を掛けます。

「『ゴブリン退治で来ました。依頼をください』

すると男性はすく笑顔になつて、

「おお、君達かい。学校長から話は聞いているよ」

どうやらこの男性が町長で間違いないようです。

僕は地面から起き上がって、町長と話を続けました。

「『ゴブリンはどう』といいますか?」

「『ゴブリンはこの町の外れにある【廃墟の炭鉱所】に住み着いている。彼らはとても凶暴で危険だ。ぜひ頑張つて、スーザの宝石を取り戻してください。』

旅は過酷なものになるだろう。君達の役に立つかはわからないが、これは私からのささやかなプレゼントだ」

僕は『生命回復剤』と『毒消し草』、『妖精の粉』に『パワー増幅剤』そして『町長の食べかけのアメ』をもらつた。

僕は無言で『町長の食べかけのアメ』だけはそつと返した。  
そのアイテムは『自分で消費してください』

町長は話を続ける。

「余談ではあるが、私の頭上有る吹き出しの絵なんだが  
僕を押し退けてクレイシスさんが苛立しく催促する。」

「そんなことはどうでもいい。早くクエスト依頼をしどうでもよくねえ！」

「待つて！」

僕は慌てて叫び、待つたをかけたが。

町長はにこりと笑つて、

「それじゃ、君達の健闘を祈つているよ」

町長の吹き出しの絵が消えて、僕の頭上に【奪還依頼】と金色の文字が現れました。

「嘘だろおおおツー！」

僕は町長の服を掴んで泣きわめきました。

「何してんのや？ ヨーイチ」

「行くぞ、ヤマダ」

「ヤマダさん？」

「放置でいいと思つわ」

「ボクたち先に行くからね」

仲間達の呼びかけをよそに、僕は泣きながら町長の服を掴んで激しく上下に揺する。

「頼むから教えて。ほんと本気で教えてください。あの吹き出しのケーキの意味はなんですか？ なんでケーキにしたんですか？」

「…………」

もつ、今夜は眠れそうにないです。

三、何かを忘れていませんか？（前書き）

眼鏡変えました。

### 三、何かを忘れていませんか？

【第三試験】 ゴブリンからスーザの宝石を奪還せよ。

はい。僕たちは今、廃墟の炭鉱所の前まで来ています。やはり町長が言っていた通り、廃墟の炭鉱所は多くのゴブリンに占拠されていました。

門番のゴブリンが一人。

その門の出入り口から見回りのゴブリンが何匹も巡回しています。敵の守備は万全です。

もし一匹でも僕らの存在を見つけてしまつと、大勢のゴブリンが一斉に袋叩きに来ます。

大変危険な試験です。

だからといって、僕たちはいつまでもこんなところでウジウジ恐怖がついているわけにはいきません。

いかなる恐怖や困難があるうと、僕たちは前に進むしかないのです。

問題はどうやって敵に見つからずに忍び込むか。

僕の力量が試されます。

仲間の安全を確保し、さらに効率良い戦い方をしなければ、パーティは全滅です。

誰かがゴブリンを引きつけてくれればいいのですが……。

……。

みんなの視線が僕に集中します。

「 つて、なんでまた僕！」

さも当然とした顔でクレイシスさんが答えてきます。

「他に誰が居る？」

勇者を何だと思っているんですか。

すると、グランツェが僕に向けて『グッド・ラック』と親指を突き出します。

「お前の勇者魂を見せるんや、ヨーヨーチ」

見せるどころか、そのまま昇天していきそうな気がします。  
「運良く生き延びればレベルも上がっているはずよ」

リクさん。それ、死を前提にしてませんか？

「頑張つてくださいヤマダさん」

「ボクたちがたまに遠目から見守つてあげるから」

「どんだけ薄情ですか、あんたたちは。僕は拳を固めて決意しました。」

「よし。ここはみんなで乗り込もう」

「そうだ。忘れてはならないのがこの試験の目的。今回の試験はチームワークだ。第一試験とは目的が違う。僕はみんなを説得する。」

「大事なのはチームワークだ。連携でやらないと試験に合格できない。一人でも欠けたらチームワークとは言えないだろ？」「頼むから僕を見捨てないでください。」

グランツェが考え込むように頷いて納得します。

「そやな。たしかにヨーヨーチを欠いて俺らだけでクリアするのは無意味や」

見捨てる気だつたのかよ、オイ。

クレイシスさんも納得します。

「確かにな。だが……」

再びみんなの視線が僕に集中します。

……。

あーうん。わかるよ？ みんなの言いたいことは。  
だからこそ！

「僕が先陣きつて敵のアジトに乗り込む。だからみんなは僕の後について来て」

「う。これでこそ勇者だ。」

僕は見習いの剣を構えると、第一声の雄たけびを上げて駆け出しました。

後続してみんながついて来てくれます。

恐れをなしたのか、ゴブリンが動きを止めてその場に固まります。

よっしゃ！ この勢いのまま敵陣になだれ込みだあー！

と、その時です。

ガン！

僕は敵のアジトを目前にして、見えない壁に思いつきり顔面を強打しました。

後続していたみんなは、それを見て足を止めます。

ずりすりと。

見えない壁と豪快にキスしたまま、僕は滑り落ちて地面に倒れました。

背後でグラントエが感心します。

「流石やな、ヨーハチ」

ウララちゃんが僕に駆け寄り泣きつきます。

「死んだらダメです、ヤマダさん！ 私まだヤマダさんに『好き』って告白してないんです！ 死んだら告白できないじゃないですか！」

「

いや、あの……死んでないです。

ラウル君が僕の体を棒先でシンシンと突きながら心配そうに様子をうかがいます。

「すごい自己犠牲精神だね、ヤマダ君」

リクさんが冷めた口調で、

「勇者が戦闘前から戦闘不能になるなんて聞いたことないわ。どうする? 兄さん」

いや、あの……僕を勝手に戦闘枠から外さないでください。すると返らぬ言葉に、リクさんが不安そうにもう一度、クレイシスさんに尋ねます。

「兄さん……？」

クレイシスさんは怖い顔をしたまま、見えない壁に手を当てました。

しばらくしてフッと微笑します。

「この白魔法の結界技 アイツの仕業か。いつ見ても間抜けな出来だな」

「『間抜けな出来』とは聞き捨てならないな」

声は廃墟の炭鉱所から聞こえてきました。

向かってくる大勢のゴブリンを白魔法でフリーズし、その場に固めて、男は姿を現します。

あの時汽車の中で出会った魔法使いの男でした。

魔法使いの男はクレイシスさんに向けて言います。

「所詮貴様の魔法は魔王城で身につけた黒魔法。外道の貴様にこの高貴な白魔法は理解できまい」

クレイシスさんが鼻で笑います。

「黒魔法を学んで何が悪い? お前の白魔法を見る度、つくづく黒魔法を学んで良かつたと思えるな」

「言わせておけば貴様……！」

魔法使いの男は憎々しげに表情を歪め、拳を握ります。

苛立つ魔法使いの男の背後からもう一人、見覚えのある男がこち

らに向かって歩いてきます。

白いスーツに胸ポケットにバラを挿した あの時汽車の中では  
会った金持ちの勇者です。

「ルーキー相手にマジ喧嘩かい？ 格下に見られるからやめてくれ  
よ。ボクさんの面白丸つぶれじやないか」

勇者の言葉に、魔法使いの男はしぶしぶ怒りを静めます。

「…………わかったよ、<sup>リーダー</sup>カス勇者」

「ボクちんの氣のせいかな？ 今ルビで何かを」まかさなかつたか  
い？」

「氣のせいだよアホ<sup>リーダー</sup>勇者」

「いや今のも絶対ルビで本心」まかしたよね？」

魔法使いの男は勇者を無視してクレイシスさんに指を突きつけま  
す。

「やつこつわけで俺と勝負しろ。黒魔道師クレイシス」

どういうわけか全く分かりません。

クレイシスさんが鼻で笑います。

「試験の邪魔する氣か？ 面白い。望むところだ  
いやあの……」

これって僕が主人公として決めるべきセリフだよね？

### III、何かを忘れていませんか？（後書き）

ふざけました。“めんなさい”。

タイトル変えました。

勢いで中身も変更しました。

ますますファンタジーになりました。

どうにもならなくななりました。

だから次いでにジャンルもファンタジーに変えようかと思いました。  
したが、シリアスになりそうなのでコメディーのままにしました。

「コメディーだと話が区切りやすい」という単なる我がまま。

……それだけ。

### 三、なぜか僕には敵が居ない。

貴族勇者は髪を爽やかにかき上げて言つてきた。

「やれやれ。どうやらボクちゃんも戦わなければいけない雰囲気になつたようだね」

「面倒くさいと言わんばかりにため息を吐く。

向こうが出るなら僕も負けではいられません。

僕は立ち上がり、見習いの剣を構えました。

「面倒くさいのは僕も一緒だ」

貴族勇者は馬鹿にするように笑つた。高級そうなロングソードを抜き放ち、その剣先を僕に向けて言つ。

「面倒くさいだつて？ 見習い勇者はよく吠える。負け犬の遠吠えつてやつかい？」

なんかほんと、心の底から面倒くさい相手です。

すると僕を庇かばうような形でグラントシェが大剣を抜き放つて前に進み出できました。剣先をカツコ良く、貴族勇者に突きつけて言います。

「そういうのは俺らのような雑魚を倒してから言つんやな

仲間想いのそのセリフ、感動ものです。

しかし。

「ヨーハイの実力なめんなや。こつ見えてもこのチーム最強の実力を秘めてんやからな」

はい、脅しはその辺でストップです。

するとウララちゃんも僕の前に立ちふさがり、

「そうです。ヤマダさんを馬鹿にするなら私たちが相手になります

あの〜、ウワラちゃん……。

ラウル君も拳手をして、

「あ、じゃあボクも」

ノリで参戦するのは止めてください。  
次いでリクさんも魔弾銃を手に進み出る。

「なんだか面白そうね」

「え？ 今、面白いうつて言つたよね？ 完全にノリの勢いだよね  
？ それ。

クレイシスさんがトドメの一言。

「弱者に用は無い。去れ」

「ちょっと待て！ それだと完全に無敵キャラ状態だよ、僕！ 負  
けられない雰囲気になつてんじやん！」

貴族勇者の表情が一変します。

「弱者がどうかは戦つてから言つてもらいたいものだね」  
敵の白魔法使いと貴族勇者が戦闘態勢に入りました。

「ひつらも、僕を除く全員が戦闘態勢に入ります。  
つて。

「何もできないじゃん、僕！」

「ヤマダ」

クレイシスさんに呼ばれ、僕は顔を向けます。

「勇者なら仲間を信じるべきだ」

「そや。コイツの言つ通りや、三一イチ」

「私たちが全力でカバーします。安心してください、ヤマダさん」

「あとで二十人前の弁当おひつてね、ヤマダ君」

「貸し、一つだから」

「みんな……」

後半は違う意味で泣けてきます。

クレイシスさんが僕にラッピングの箱を手渡してきました。

あ。これはあの時クレイシスさんが駅で買つたオセロゲーム……。  
だけどなぜ今？

「それをお前にやる」

「え？」

いやあの、これゲームなんんですけど。ただのゲームなんんですけど。  
「お前はそれで存分に戦え」

何気に戦力外通告していませんか？ クレイシスさん。

### 三、なぜか僕らに敵は居ない。

あーどうも。見習い勇者の山田洋一です。  
今みんなが向こうで頑張つて戦っています。

え？ 僕ですか？

僕は今、一人さみしく隅っこにうずくまつてオセロゲームのラッピングを取っています。

戦闘？ そんなの知りませんよ。

どうせ戦力外通告なんですから。

僕はようやくラッピングをはがし、オセロゲームを取り出すことに成功しました。

一つ折りにされた基盤を広げて地面に置いて、僕は首を傾げました。

「ん？」

なぜか基盤のマス目はすでに、ところどころが白か黒の定石で埋まっています。

「なんでだ？」

しばらく見ていると、黒の定石が動き出しました。  
ちょっと待って、これ……。

僕はみんなに目を向けて人数を数え、敵の人数も数えて、そして  
「つてこれヤバくね？ 人数ぴったりじゃん！ リアルゲームかよ  
ツ！」  
まさか勝つまで終われないとか、そんなゲームじゃないよね？  
これ。

すると黒の定石が一つ白の定石に挟まれてしまいました。  
戦線に目を向ければラウル君が一匹のゴブリンに挟まれています。  
黒の定石が白の定石へと変わります。

途端にラウル君が僕に向けて「ゴブリンを投げつけてきました。

「ふー」

飛んできたゴブリンを正面から受けた、僕は折り重なるようにしてゴブリンとともに吹っ飛びました。

気絶したゴブリンを退けて、僕はボロボロの体で地面を這いすりながら元の場所へと帰ります。

ラウル君が悪気ない笑顔で明るく手を振っています。

「ごめんね、ヤマダ君。なんか急にヤマダ君が敵に見えちゃって」「そ、そういうことなのか。

僕はようやく地面に広げていたオセロゲームの所に帰つてきました。

合わせるように基盤外に吹っ飛ばされていた黒の定石が、震えながらマス田のところに戻ってきます。

ああ、この黒の定石が僕なのか。

要するに黒の定石が白の定石に挟まれたり囲まれたりして反転したら、味方が敵になるってことか。

僕は定石の色と位置を確認します。

よし。まだみんな大丈夫。

キュン。

僕の頬をかすめて、魔弾が飛んできました。

「…………」

僕が驚き田で固まつていると、リクさんが真顔で謝つてきます。

「なんだか急に敵意が込み上げてきたの」「リクさん。あなたの色、思いつきり黒です。そんな時でした。

「うわああ！」

グランツォがゴブリンに背後をとられて挟まってしまいました。

「グランツォ！」

僕が心配に叫んだ途端、急にグラントがゴブリンを目の前にして武器を落とします。

戦々恐々とした顔で地面に崩れ折れ、両手を顔に当ててナニナニ立きぬき。

「なんでそんな俺ばっかりイジメるのさ。ひどいやつ。泣こむやつ」「うう」と泣き始めました。

「ああ、反転しただけでキャラ崩壊するといつなのか！？」

四〇四

黒の定石が白の定石に囲まれて います

つて、今更だけど多くないか？ 白の定石。

囮まれたのはウララちゃんでした。

「ウララちゃんの黒の定石が田の定石に変わります。」

僕は心配に叫びました。

するとウリナリちゃんが急に暗く俯き、髪に結んでいたゴムを取りました。

ぱわっと、ウーブかかった長い髪が色っぽく、かわいいやんの顔に流れ落ちてきます。

「アホ」

僕はなんだかドキドキするような鼓動を感じました。

ウララちゃんはかけていた眼鏡を外し、戦意に満ちた勇ましい顔を上げて、そして

いきなり怒涛の「」とく吼えます。

「やつ きかひハギハ てえんだよ、 てめえハ」

レコルトした空氣がみんなを一瞬で凍らせました。

を描き始めます。

魔法陣が完成したようです。

ハリハリちゃんは悪魔のよつたな笑みを浮かべて言いました。

「エドガ・ワーハン」

完成した魔法陣が巨大化し、大勢の「ゴブリン」が地面の中に引きずり込まれていきました。

ゾツとする光景です。

全ての「ゴブリン」を地面の底に引き込んだ後、まっさらな大地となつた場所に一人佇み、ウララちゃんはフツと鼻で笑います。

「線一本間違えて全員地獄に墮としちゃった」

怖ええええよッ！ ウララちゃん！

僕とラウル君でウララちゃんのところに駆け寄つてウララちゃんを元の色に戻します。

ウララちゃんはまるで夢でも見ていたかのように、ちょっとんとした顔で両手を耳に当てる。

「あれ？ あれれ？ 眼鏡眼鏡……」

良かつた。元に戻つてくれたあ。 つてその髪型可愛すぎるよ、ウララちゃん！

地面を手探りするウララちゃんに、僕は側に落ちていた眼鏡を拾つてウララちゃんに差し出す。

眼鏡をかけてウララちゃん。僕を見つめてにこにこと笑う。  
「ありがとうございます、ヤマダさん」

その後グラントンにも駆け寄り、元のグラントンに戻します。

「お？ モーライチ。どうしたんや？」

残る敵は二人。

貴族勇者と白魔法使いの男です。

僕はウララちゃんとラウル君、グラントン、リクさんを引き連れて駆け寄ります。

すると一人と対峙していたクレイシスさんが急に怒鳴つてきました。

「馬鹿！ 来るなヤマダ！」

「あ」

気付いたが、すでに遅し。

基盤の定石が全て黒になつたのはいつ頃までもあります。

#### 四、冷やし中華始めました。

風に揺らめく黒い髪。

着物姿のとても似合ひの少女は、手に持っていたピンクの封筒を胸に抱き、「ほう」と静かに息を吐く。

「これが恋といつもののですね」

少女はひとしきり自分に酔いしれた後、行動に出る。

目前にある靴箱のフタを上品な仕草で開ける。

そこから香りくるスイーティな刺激臭。

思わず二つ指で鼻をつまむ。

そして、やきほじまで抱きしめた封筒をそつと靴の上に置くと、何事もなかつたかのように優しくフタを閉じた。

ほう。

少女は息を吐いて、両手を心の臓へと当てる。

「キヤキヤ、キヤキヤ……。

恋といつもののは突然始まるものです。

冷やし中華もそう。

偶然入った食事処で、ふと壁にぶら下がったメニュー板へと目をやると、いつの間にか『冷やし中華』が仲間に入っている。本当はおソバを食べに来たはずだったのに……。

ああ、なぜわたくしはこんなにも冷やし中華といつもの元に惹かれるのでしょうか。

田移りしてはいけない。  
でも気になるのです。

「この高鳴る気持ちは偶然でしょうか。」

「いいえ、運命です。」

わたくしと彼はいつか「ひやひや」で出合つ運命にあつたのです。

少女はその靴箱に想いを寄せ、仄かに頬を染める。まるでその人物がそこに居るかのように、

「さうですね？」山田洋一さま

#### 四、じゅげむ・じゅげむ……。

クレイシスさんが珍しく、僕の教室にやつてきました。

「ヤマダ。ちょっと来い」

何があつたのでしょうか。

僕は理由もわからず廊下に呼び出され、クレイシスと一緒に会います。

「第四試験はまだですけど」

「わかつていい。リクからお前に渡すよう頼まれたんだ」  
そう言つて、クレイシスさんは僕にピンクの封筒を渡してきました。

僕はドキドキしながらその封筒を受け取ります。

「勘違いするな。お前が弟になるなどあり得ないし、考えたくもない

どんな全力否定ですか？ それ。

「リクも頼まれたんだ。『ヤマダに渡してくれ』とな。だがこの手紙を魔弾とともにヤマダに送つたところで、

なんで魔弾もセットなんですか？」

「眉間でしか受け止められないだらうからと」

なんで撃ち込み限定なんですか？」

「オレがお前にこの手紙を渡すことになつたんだ。だからオレの妹に好意を抱くのはやめろ」

「どういう流れでそうなるんですか？」

急にクレイシスさんが考え始めました。顎に手を当てぶつぶつと咳きます。

「そついえばこの手紙、ものすごく人伝いで流れているな」

「え？ これ、誰からどのようになにに流れているんですか？」

「リクは武器防具のエメリシアからこの手紙を頼まれたんだが、エメリシアはスペクタルという男子生徒から頼まれて受け取った。だがスペクタルはアルゲルマという男子生徒から『コイツ知らないか?』と受けて、アルゲルマはイリングダという元カノからこの手紙を預かつて、イリングダはハルカという女子生徒からこの手紙を受け取つて、そのハルカという女子生徒はイトウという男子生徒からこの手紙を受け取つて、そのイトウはアセルスという男友達から受け取つて、アセルスはファムという男友達から

「

「もういいです。クレイシスさん  
『結論でいえば』『コイツ誰?』だ  
どんだけ影薄いんですか、僕は。

そんな時でした。

「おー、ヨーヨーチ。こんなところで何してんのや?」「  
グランツェが廊下の向こうからやってきました。  
すぐにグランツェの視線がクレイシスさんへと流れます。  
「何してんのや?」  
魔道師

クレイシスさんが素つ氣無く答えます。

「正確に言えば元・魔道師だ。だからいつものよつと魔法使いでいい

「どーでもええや。こんなところで何してんのや? 魔法使い  
はあ。

クレイシスさんが疲れたよつとため息を吐いて答えます。

「また一からあの流れを説明しないといけないのか  
「なんのことや?」

「結論を言えば『リクエメリアスペクタル、アルゲルマ、イリングダ

ハルカ、イトウアセルスファム

「

「何の呪文や？ 魔法使い」

「ヤマダ。説明してやれ」

「え？ なんで僕が？」

#### 四、それってヤバくないですか？

僕は教員室に呼び出されました。

カルロウ教師のお告げです。

「山田。第四試験は護衛だ」

僕は元気良く手を挙げて質問しました。

「はい、先生」

「どうした？」山田

「誰をどこにどうのよつた護衛ですか？」

「いい質問だ、山田」

「いえ普通です」

「アップリナ大公の娘 イリア嬢が隣国でサマー・ライブを決行するそうだ。その会場までの護衛だ」

「先生。突つ込みどころが多すぎます」

「そこは流せ、山田」

「では先生。とりあえず彼女についていつてあげればいいんですね」

カルロウ教師は僕の肩にぽんと手を置いて同情します。

「頑張れ、山田。これを乗り切ればきっと良い事があるはずだ」

「先生。すごく嫌な予感がします」

「気のせいだ、山田。道は辛く険しい。どんな敵が現れようと気をしつかり持て」

「え？ ただ汽車に乗つてついていくだけですよね？」

「馬鹿言つな、山田。乗り物は汽車じゃなく馬車だ。イリア嬢は馬車がお気に入りだ。汽車ならば民間の護衛企業も断つていない」

「どんだけテンジャラスな冒険させる気ですか？」

「ちなみにこれができれば進級だ。お前が断るならば他の勇者志願者に頼むが？」

「やります、先生」

よし。すぐに作戦会議を開こう。  
イリア嬢にはなんとしても汽車に乗っていただきくんだ。

#### 四、僕は何かを忘れている。（前書き）

お気に入り登録してくださり、ありがとうございます。  
心からお礼申し上げます。

#### 四、僕は何かを忘れている。

はい、恒例の作戦会議です。  
議題はもちろん

「どうすれば【いりあサマーツアー・ヨコ】のプレミアムチケットが取れるのか、だ」

違います。

そして顔が近いです、クレイシスさん。

「お前は気にならないのか？ ヤマダ」

たしかにそれは僕もすこく気になっていました。

アップリナ大公のイリア嬢といえば、全世界が注目する歌って踊れるトップ・アイドル。和服の似合う黒髪美少女。清楚な印象と優らし子犬のような瞳が、すこく萌

「ヤマダさん！」

「はい、ごめんなさい！」

ウララちゃんの怒りの声に、僕は土下座で謝る。

いや、別に悪いことしているわけじゃないんだけど、なぜだろう

？

僕は身を起こして咳払いする。

「とにかく、今は彼女を安全に現地に届ける為の作戦を考えるんだ」  
ダン！ と、グランツェが僕の前にある机を叩いて迫つてきました。

「きつとせいつは偽モンや、ヨーヨーチ

「え？」

「あのイリりんが俺らに護衛を頼むはずがないやろ」  
「ま、まあたしかにそうだけど……」

「お前はカルロウ教師に騙されたんや」

「どちらかといえばそっちの方が、僕としては気が楽です。あーいや、でもほんのちょっとくらいはそんな奇跡の出会いを

「ヤマダさん！」

「はい、ごめんなさい！ 真面目にやりますー。」

僕は反射的に土下座で謝った。

ふと、クレイシスさんが何かに気付き考え込みます。

「偽者か……」

「え？」

僕は顔を上げてクレイシスさんに問い合わせました。

クレイシスさんが言葉を続けます。

「もしかしたらファンの田をこっちに引きつけておいて、本人は汽車で現地へ行く。 といつことも考えられる」

「そうか！」

僕はその言葉にピンときた。

試験の目的はそういうことだったのか！

「さすがクレイシスさん！ ありがとうございますー。」

「は？」

呆然とするクレイシスさんの手を僕は感激しながら掴んだ。

勇者として、僕はそういう裏設定に気付かなければならなかつたんだ。

大事なモノを守れてこそ勇者。

もし村に魔物が襲つてきたら僕達は魔物を村の外へと誘導し、村の安全を守らなければならない。

教科書は七百三十六ページ。護衛法第三十二条 村の安全と保護より抜粋。

僕は燃えてきた。拳をぐつと固める。

「よおーし！ ジャあ僕達は全力でファンをこっちに誘導し、偽イリア嬢と本物のイリア嬢の身の安全を守つてみせるんだ！」

ウララちゃんが僕の姿に感動し、目を潤ませる。

「カツコイイです、ヤマダさん！」

クレイシスさんが危険な笑みを浮かべます。

「誘導後は任せろヤマダ。黒魔法を全力で叩き込んでやる」

その時は全力で止めさせていただきます。

「俺もや、ヨーイチ。新技連発してやる」

「私も頑張ります、ヤマダさん！ 魔界からたくさん魔物を召喚してヤマダさんをサポートします！」

「……」

僕はテンションを落とした。重い影を背負つて頃垂れる。

「じめん、みんな。普通にやろうよ。このままじゃ僕達、進級どころか人生の道を踏み外していきそうだ」

クレイシスさんが僕の肩にポンと手を置いて励します。

「魔王も最初はそう言つていた」

僕はその時気付きました。

本当に守るべきものはファンの方々の安全なのかもしない」と。

#### 四、いいかげんにじゅうよ、『ラ!』

はい。僕達は今、待ち合わせ場所である【バントテン町の三番街停留所】に来ています。

意外に学校のすぐ近くです。

今回はイリア嬢の護衛ということで、みんなすぐここに集まってくれました。

「 って、なんか仲間が増えたね？」

何の怪奇現象が起こったのでしょうか。

僕は目をこすって、もう一度指で人数を確認してみます。

クレイシスさん、グラント、ウララちゃん、リクさん、それと

「 なんで居るの？」

僕は第三試験で出会った貴族勇者と白魔法使いの人尋ねました。貴族勇者がお手上げして僕に言います。

「 Why? なぜそんなことを聞く? 僕さんは君達の仲間じゃないか」

「俺たちを仲間にしたのはお前だ、新人勇者ヤマダ」

「え? まさかあのオセロゲームの呪いはまだ続いていたんですか?」

僕はクレイシスさんに視線を向けます。

するとクレイシスさんは肩をすくめてお手上げしました。

「あのゲームなら昨日リサイクルショップに売った」

「そんな危険な物を市場に流さないでください。」

「魔法の効力も切れていたしな。ただのゲームに成り果てたから問題ない」

僕たちには問題大有りです、クレイシスさん。

ウララちゃんが僕に言います。

「いいじゃないですか、ヤマダさん。仲間はたくさんいた方が楽しいですよ」

「そや、ヨーヨー。」のままでええやんか  
しかし、リクさんだけが僕に魔弾銃を突きつけて怖い顔で言います。

「一つのパーティに勇者は一人もいらない」  
「えええつ！」

僕は慌てました。

貴族勇者が割って入ります。

「僕ちんの為に争わないでくれよ。僕ちんはみんなの物だ」  
「黙れ、お前。黒魔法を全力でぶち込むぞ」  
「落ち着けや、魔法使い」

貴族勇者に殺氣向けるクレイシスさんをグラントが慌てて止めます。

すると白魔法使いの人気がクレイシスさんの前に立ちふさがりました。喧嘩腰で指の関節を鳴らしながら、「そういえば魔法使いも一つのパーティに一人いらないな。特に黒魔道師、貴様は論外だ」

「上等だ。ここでケリをつけよつ

「まあまあ落ち着けや、魔法使……魔法使いのお一人さん」  
グラントの一言が、さらに一人の闘志をあおります。  
ウララちゃんが泣きそうになって、

「もう喧嘩は止めて下さい！ 私、私……」  
語尾を涙でくもらせて、ウララちゃんはとつとう泣きだしてしました。

リクさんが銃口を下ろして、僕に指を突きつけてきます。

「お前が泣かせた」

「え！ なんで僕！？」

唖然とする僕の隣で、貴族勇者が独り舞台を踊ります。

「ああ泣かないでくれ、子猫ちゃん。僕ちゃんはみんなの物だ」「勝負は三分といこう。問題あるか？」黒魔道師

「ない。一秒で終わらせる」

「白も黒も喧嘩すんなや。魔法使いは一人でええやろ?」「クレイシスさんがグランツェにきつぱりと言い放ちます。

「オレは黒魔法が使える白魔法使いだ。白魔法使いは一つのパーティに一人もいらない」

白魔法使いの人も頷きます。

「そうだ。二人もいらない」

グランツェが雰囲気に圧されて身を引きます。

「ほんなら存分に戦えや。一人とも」

それを合図に二人の魔法使いは白魔法を手中に出現させました。

「回復魔法で勝負だ、黒魔道師！」

「望むところだ！」

二人同時に魔法を放ち、お互いに回復魔法をかけ合います。

グランツェが頬を引きつらせて、ぼそりと。

「アホや、アイツ等……」

そんな彼らをよそに、僕は貴族勇者にこのパーティから脱退してもらうよう申し出ました。

「たしかにリクさんの言つ通り、パーティに勇者は一人もいらない。これ以上は喧嘩の原因にもなるし、できれば

貴族勇者がきょとんとした顔で首を傾げます。

「僕ちゃんは勇者を名乗るつもりはないよ」

「え？」

そう告げると、貴族勇者は腰に装備していた剣を抜き放ちます。

剣の刃に軽くキスをし、

「僕ちゃんの得意技は剣の舞。だから僕ちゃんは剣士を名乗るよ」

「上等や、『ララ!』

グランツェが大剣を抜き放つて構えます。

「わああ！ 待つてグランツェ！」

僕は慌ててグランツェを止めに入ります。

このままではパーティ崩壊どころか依頼人に迷惑をかけてしまう。  
依頼人はあのアップリナ大公の娘だ。こんな雰囲気を見せて『頼り  
ない』と思われたら、噂が広まつて今後一切どこからも依頼がもら  
えなくなる。

僕は決死の覚悟に出ました。

「みんな、とりあえず落ち着いて！ 僕の話を聞いて！」

喧嘩は止まり、みんなが僕に注目します。

僕は言いました。

「こうしよう。僕達は小規模パーティを組んだ。みんなで協力し合  
つて一つの依頼を達成させるんだ。これならいがみ合う理由なんて  
ないはずだろ？？」

みんなが僕の意見に納得します。

争いが收まり、パーティは再び穏やかな雰囲気を取り戻しました。

うん、これでよし。

なんか今日の僕はすごく輝いている。  
するとリクさんが、また僕に指を突きつけ言いました。  
「パーティに弱者はいらない」

以下、振り出しに戻る。

「.....」

僕はがく然と地面にひざを折つて頃垂れました。  
もういいかげんにしてくれ。

そんな時でした。

一台の大型馬車が僕達の前で停車しました。

#### 四、おひと。遊びはそこまでだ。

##### 【第四試験】 イリア嬢の護衛。

馬車から出てきたのは、なんとあのイリア嬢でした。イリア嬢は馬車から降りてくるなり、いきなり僕に抱きついてきました。

「ヤマダ様。イリアはずっとヤマダ様にお会いしどうじでござりました」「ええええ！」

いきなりのこと、僕はわけわからず驚きました。ウララちゃんの目が殺氣立ち、魔法の杖を構えます。リクさんが魔弾銃を構えて僕に狙いを定めます。

グランツェが大剣を抜き放つて僕を睨み、貴族勇者も剣を抜き放ち構えます。白魔法使いさんは光魔法を詠唱し始め、クレイシスさんの手中にはどす黒い闇の魔法が生まれ

「ちょ、ちょっと待つて！」

僕は慌てて両手を振り、みんなの誤解を解こうとしました。

「何ががおかしいよ！ 彼女が本物のはずがない！」

するとイリア嬢はきょとんとした顔で僕を見つめて不思議そうに小首を傾げてきます。

「イリアは本物でござります。今回の依頼のこと、学校からお聞きになつたのでは？」

僕は答える。

「護衛の話ですよね？」

「はい」

「僕たちで本当にいいんですか？」

「あなた方はけして誰も受けないような過酷なクエストをも絶対に

断れないパーティだと聞いています

それ、どんだけ将来崖つぶちパーティですか。

僕は念のために尋ねます。

「あの、今回の護衛内容を一応確認しておきたいんですけど。護衛というのはファンの方々からあなたの身を守ればいいんですね？」

「いえ、違います」

「え……？」

「ファンなら誰もがこのことを知っています。だから今もこうしてイリアには誰も近づかないんです。イリアは必ずライブ前にオリジナルの歌を作ります」

「あー、あの毎年やる予定にないオリジナルの歌だね」

「はい。あれ全部本番前にイリアが即興で作っているんです。今回はラブ・バラードを作ろうと思っています。敵に捕まつた姫を勇者が助けに行く、そんな切ない気持ちをイリアは歌いたいんです」

なんだか嫌な予感がしてきました。

イリア嬢は話を続けます。

「ダンジョンで強い敵と戦いながら、勇者は数少ない仲間たちと力を合わせて姫を助けに行く。それを見ている姫の切ない気持ちをイリアは歌いたいんです。想像だけでは歌は歌えません。だからイリアは身をもつてこれを体験するのです」

「もしかしてそれ、実践でやるつもりしてん？」

「はい」

「……」

僕はこの時になつてようやく察しました。

なぜみんな、ライブ前の彼女を避けるのか。そしてなぜ、誰もが彼女の護衛を断るのかを。

呆ける僕を見て、イリア嬢は何を勘違いしてか感謝を言います。

「この歌に相応しい勇者はヤマダ様以外に居ません。イリアは勇気を振り絞つて【ギガ・ダンジョンへの通行証】を手に入れてきまし

た。もしかしたら最悪な事態が起るかもしれませんが…

でもこれも全てライブを成功させる為!

さあ。勇気を出して行きましょう、ヤマダ様

「……」

クレイシスさんがぽんと僕の肩に手を置きます。

「今からでも遅くはない、ヤマダ。お前は手記を遺しておけ。オレは絶対に死なない自信があるけどな」

グランツェが楽しそうに興奮します。

「ダンジョンや、ヨーデル！ ダンジョンといえれば死人や！ これで経験値が大量に稼げる！」

白魔法使いさんと貴族勇者があつさりパーティから離脱します。

「じめん。なんか急に魔法の調子が

「あ。もうこんな時間だ」

ウララちゃんが僕の前に来て力んだ顔で言います。

「ヤマダさん！ 私、ヤマダさんがアンデットになつたら必ず現世に呼び戻してみせます！ たとえヤマダさんの肉体がボロボロになつていたとしても、私だけはヤマダさんのこと

「リクさんが改めて僕に向けて魔弾銃を構えます。ぼそりと、

「……今のうちに逝つとく？」

「なんで僕だけアンデット化！？ なんで歌を作る為だけにギガ・ダンジョン！？ 魔王だってそんな目的でダンジョン管理しているわけじゃないと思うよ…」

声を荒げる僕に対し、みんなの反応はとても落ち着いていた。

リクさんがクレイシスさんに尋ねます。

「……そこそここの事情つてどうなの？ 兄さん

クレイシスさんが肩をすくめてお手上げします。

「魔王だってダンジョンに客が来なかつたら経営する意味ないだろ」「もはや勇者は客扱いッ！？」

どうやらダンジョンとは、僕が想像している以上にとんでも客寄

セクトリカル・シップへの参入です。

#### 四、てめえら、マジでいいかげんこしやー。

気合い入れて乗り込んだギガ・ダンジョン。  
古びた城を魔物が乗つ取つたそのダンジョンは、今はものすゞぐく  
……なんというか、本当にものすゞぐくかわいそうなぐらい破壊され  
た状態になつていきました。

「何があった？」

クレイシスさんが近くの墓標に問い合わせます。  
つて、ちょ、クレイシスさん？  
するとその問い合わせに、墓標の下から顔だけ出して子供ゾンビが  
可愛らしい声で答えます。

「勇者にやられたですぅ」

隣の墓から母親ゾンビが顔を出します。

「このダンジョンはまだ壊滅状態です」

次いでゾンビA、ゾンビB。

「クレイシス様。どうか我々をお助けください」  
「次に勇者が来れば我々の命はありません」

「そりか……」

納得し、肩を落とすクレイシスさんに僕は冷静にツツ「ミミを入れ

四〇

「あの、クレイシスさん？」彼らの言う『次に勇者』というのが僕たちなんですけど

「そうだな」

「ヤギヤギ、西郷市にやるんか？ パーリチー

グランツヨがほろほろになつた城を見つめて喰きます。

……いや、それ言つたら又ケリ悪者じやん、僕ら

う、ハハハ、おやじも泣きそうになつて僕は詰めます

ヤマタさんはそんな非情な人じゃないはずです！」

い、言つとくけどゾンビは敵だからね？ ウララちやん。  
でもそうは思うものの、僕だって弱っている敵に戦いを挑むのも  
どうかと考え直します。

イリア嬢がほんのりと頬を染め、僕に言います。

「ヤマダ様にさらわれるという設定もむしろアリだと思います」

いや、本気で待つて。それはそれで何かが間違っているよ。  
僕はイリア嬢に説得を試みます。

「もうこの際ギガ・ダンジョンは諦めて汽車で現地に移動しません

か？ その間でもラブ・バラードを作る」ことはできるはずです。僕たちも協力しますから」

リクさんが僕に向けて魔弾銃を構えます。

「『HIREN』。届かなかつたジュリエットの想い』っていつのはどう？」

そこは明るめのラブ・バラードでお願いします。

僕は向けられた銃口を静かに横に退け、イリア嬢に説得を続けます。

「このままだとライブの時間にも間に合わなくなるし、できればもつとこう、効率的に」

と、その時です。

勇ましい足音とともに、大勢の団体さんがやつてきました。

……なんだかすごく嫌な予感がします。

その団体さんは全員重装備に身を包み、頭にハチマキ、そしてレベル高そうな武器を片手に怖い顔をして向かってきました。

ハチマキに書かれた『イリア命』。

掲げた旗に『天誅』の文字。

先頭を歩く人物に、僕たちは見覚えがありました。

貴族勇者と白魔法使いさんです。その後ろに従えているのはイリア嬢ファンクラブの皆さんなのでしょう。

二人は僕たちを指差して叫びます。

「あそこには居る見習い勇者が依頼に託けて我等のイリリんを誘拐し、  
独占している！」

一人の背後にいた彼ら イリア嬢ファンクラブの皆さんは、そ  
の声に賛同し、地を唸らすように僕に向けて罵声を浴びせてくれます。

なんてこった！

僕は頭を抱えました。

やはりあの時依頼を知っている一人をメンバーから外すべきでは  
なかつた！

『依頼は絶対他人に教えないようにしましょう』

先生が授業で言つていた教訓が今頃になつて脳裏を過ぎります。  
「ど、ど、どうしよう……！」

こんなパニック状態の頭では最良の解決策が浮かんできません。  
でもここはリーダーの僕がしつかりしないと！

ウララちゃんの表情に怒りが走ります。ぎゅっと手中の杖を握り  
締めて、

「あんな言い方酷すぎます。ヤマダさんはそんな人じゃありません。  
私が行つて説明してきます」

「ダメだよ、ウララちゃん」

僕はウララちゃんを止めた。

そうだ。ウララちゃんを一人で行かせるのは危険すぎる。群がる  
狼どもの中に子ウサギを入れるようなものだ。

けど、だからといって僕やクレイシスさん、グランツェと一緒に  
行けば逆効果に過ぎない。

こんな時にラウル君が居れば……！

もうここで頼れるのはリクさんしかいない。

僕は視線でリクさんに助けを求めました。  
その視線にリクさんが応えて頷きます。

魔弾銃を構えて、

「……つてちょっと待って！ それやつさひつと僕たち思つつきり  
敵側になるからー。」

慌てふためく僕とは裏腹に、クレイシスさんとグランツェが好戦  
的な笑みを浮べます。

グランツェが指の関節を鳴らしながら、  
「敵側上等や」「」

「どうやら奴等を潰すしか他に方法はないよつだな」

「お？ 奇遇やな、ボケ魔法使い。口口に来てようやく俺たち意見  
がおうたな」

「『ボケ』は余計だイカレ剣士。足引っ張るなよ」

「『イカレ』は余計やボケ魔法使い」

僕はひくひくと頬を引きつらせながらクレイシスさんに言います。

「あの、クレイシスさん？」

「なんだ？」

「潰す以外にも友好、安全、逃走の選択肢が  
「潰す」

速攻コマンド選択！？

「そや、ヨーイチ。ガンガン行こうや」

なんであんた等そんなに乗り気なんですか？

グランツェとクレイシスさんが一斉に懐から「ホールドカード」を取  
り出して僕に見せます。

「理由は単純だ、ヤマダ」

「俺らはあいつ等を潰してイリりんのライブチケットの先行予約順  
位を勝ち取りたいだけや」

その力は正義のためだけに行使してください。

「そういうことでヤマダ」

「いこは俺らに任せろや」

任せられません。

「アイツ等はオレ達で引き受けたる」

「先に行けや、ヨーヨーチ」

先に？

「一人の視線が一緒になつてギガ・ダンジョンに向きます。  
これつて予感的中でしょうか？」

「ヤマダ。お前はあの城の最上階でウララとイリア嬢を連れて避難してろ」

いや、あの、クレイシスさん。僕たちは一応……

いつまでも動かない僕に向けて、クレイシスさんが手中に黒魔法を生み出しながら苛立つように言葉を続けます。

「ヨーヨーチを一掃する。オレの術に巻き込まれたいのか？」

手加減無用の無差別攻撃！？

「そやヨーヨーチ。アイツ等に時間を取られてイリリンがライブに間に合わなければ試験は不合格や」

そ、そこを言われると何とも……。

クレイシスさんがてきぱきと指示を出します。

「リク、お前は念のために城の中層階を守れ」

「わかつたわ、兄さん」

するとゾンビアーネまでがクレイシスさんのところに這い寄つて来て、

「俺たちも戦うゾナー」

「おらたちも仲間の敵討ちやるだあ」

「打倒勇者だがやー」

その言葉になぜかウララちゃんが感動して、

「私もゾンビさんと一緒に戦います！ 打倒勇者ですー！」

う、ウララちゃん！？

驚く僕に気付いたのか、ウララちゃんがハツとしたような顔で僕を見た後、慌てふためきながらさきほどの言葉を訂正します。

「あ、あの、ヤマダさんのことじゃないですかからね。たしかにヤマ

「ダさんは勇者ですか? 悪い勇者を打倒なんですね」

そういう問題じゃなことよ、ハリウッドやん！

その間にもクレイシスさんがゾンビたちに守備を指示します。

「よし。じゃあ体格のでかい象さんチームは右だ。白か黒かよくわ

からないパンダさんチームは中央、行動の遅い残りのカメさんチームは左だ

なんで運動会的な配置！？

あの、ケレイシスさん

なんだ?

「一応僕たちは勇者側の」

「ヤマダさん、一いつ歩です」

葉半ばでわざわざちやんが業の十碗を圍んで連れていかれる。

「ヤマダ様、イリアも依頼人としてあなたの傍に居ます！」

反対側の片腕にいたウララちゃんが怒ります。

「ヤマダさんの傍に相応しいのは私です！」

違います！

「違います！ 私です！」

僕は言い合つ二人の間を裂いて、

「ジーでもいいけど、最上階に避難するのよやねないよ。」

# まだ僕が魔王に

『バービーでもよくなつまわんー。』

怖い顔のウララちゃんといリア嬢に言われて、僕は思わず言葉を飲みました。

そのまま僕は半ば強制的に一人から最上階に連れて行かれて、そして……。

「ヤマダさんの隣は私です！」

「いいえ、イリアです！」

「ちょ、待つて二人とも！ つてか、なんで喧嘩になつてんの！？」

「ヤマダさんは黙つてください！」

「そうです！ 女の喧嘩に口挟まないでください！」

ええええッ！ なんでそんな事態になつてんの！？

はたと氣付いて見回す最上階。

最上階 王の間では、幾人もの「ゴースト達が黒い鎧アーマーや悪趣味な兜かぶとやマントを手に、王座のとこりで今は「きダンジョン・ボスを想つて泣いていました。

僕は慌てて一人を止めます。

「ちょっと待つて！ なんかヤバイよー！」

すると泣いていたゴーストが僕たちの存在に氣付いて言います。

「おや？ クレイシス様のご友人たちがどうしてこちらに？ まあ理由はどうあれ、外はレベルの強い勇者どもがうろついていて危険です。わざ、どうぞこちらへ。我々がお守りいたします。

おお、あなたは特にレベルが低い。水色スライムと同じレベルとお見受けします。勇者に襲われる前にどうぞこの防具を。

え？ これですか？

これは……ふふ、そうですね。昨日まで魔王様のご友人であるバラモン様がお使いになっていたものです。気にしないでください。バラモン様はもうここには居ませんから」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3279o/>

---

勇者ヤマダ【見習い編】

2012年1月13日20時48分発行